

第9回方法論セミナーQ&A記録	
<b>Question</b> <b>&lt;事後追加コメント&gt;</b>	<b>Reply</b>
モジュール化という提案は、研究者育成という観点からみて功罪があるのではないのでしょうか	竹澤先生のコメント:ここで念頭においてるのは、学部生から、博士課程への進学予定のない修士院生までです。たとえば紹介事例の中で登場する学部生は、実験を実施し、データ分析もして、卒業論文を執筆しました。もう一人の修士院生も、自分で実験を実施した上で、モデルシミュレーションからモデルフィッティングに至る一連のプロセスを遂行しました。いずれも、従来の心理学教育の基準から見れば、十分に一つの研究を完結しています。そもそも博士課程まで進学する学生であれば、新しい研究慣行の下でも、一人で大きな研究を遂行する時間があるため、提案の対象ではありません。博士以上については、最後のスライドで別の議論をさせていただきました。従来の研究慣行では十分とされた研究でも、新しい研究慣行の下では、不十分とされる時代。研究者の道を選ばない、数多くの学部生や修士院生を教育しながら、どうやって新しい研究慣行と向き合えば良いのか。それに対する、一つの取り組みを紹介させていただいたものです。山田先生の言葉を使えば、卒業論文におけるマイクロ・パブリケーション化の提案です。ただし、心理学教育において、卒業論文にどのような意義を求めるとか。今後の議論は必要だと考えています。
<b>&lt;当日のQ&amp;A&gt;</b>	
【村山先生へ】最近の心理学では、“Replication Crisis” “Generalizability Crisis” “Theory Crisis” など様々な「危機」が叫ばれていますが、これらは「根っこは同じ問題」と捉えて差し支えないのでしょうか？（質問というより確認ですみません。ご発表、とても勉強になります）	村山先生のコメント:同じだと思っています。私の中では人間観の問題です。
>山田先生 イントロ相当のものをhypothesesで書いておく、方法に書くようなものをモデルで書いておく、といった話があったと思うのですが、イントロと方法まで書いたものを(OSFのフォーマットでなく)pdfとしてアップしておく方法では何か問題などありますか？便利論文にあるような事項まで方法に細かく記載するとして。	山田先生のコメント:OKです！
>山田先生 プレジを閉じても文章は残ってしまうのでしょうか？（残ることにかなり抵抗感あります）	山田先生のコメント:まだ実用化されている話じゃないのかわかりませんが、残さないという意味がない気がします。SHARKingみたいなことができやいますし
Creative Commons の設定は、ここで宣言しておけば、他でなにか登録の手続きをする必要はないのでしょうか。	山田先生のコメント:はい、ここだけで大丈夫です。
OSFで査読用に匿名リンクを作成した場合に「https://osf.io/xxxx?view_only=yyyy」のようなURLが生成されますが、OSFがPublic設定だとhttps://osf.io/xxxx にアクセスすると著者がわかるのはしょうがないのでしょうか？embmergolにしないダメなんでしょうか。	山田先生のコメント:なるほど、そこは不便というか不具合というかな気がしますので、OSFに伝えたいところですね。けっこう普通に対応してくれます。
OSFにプレジして実験したもののNULLだった場合、それでも論文にするのでしょうか？論文にしない場合はプレジを閉じるべきなのでしょうか？	大坪庸介先生からのコメント:それはプレジした仮説の「重さ」によると思います。この要因の効果が無いというのは広く知られるべき発見だということであれば、NULLでも発表すべきだと思います。逆にそならない内容をプレジするとしたら、もう一度仮説を検討すべきなのかもしれません。
OSFにプレジして実験したもののNULLだった場合、それでも論文にするのでしょうか？論文にしない場合はプレジを閉じるべきなのでしょうか？	山田先生のコメント:OSFにプレジして実験 私は論文にしています。雑誌的に受け入れてくれるかまだ不安でしたら、レジレポをおすすめします。
ある雑誌に論文を投稿した際に、探索的な目的で検討しているため仮説を設けていなかった点について、査読者から「仮説を設けるべきだ」とコメントをいただきました。それについてはどう思われますか。論文執筆者のQRPが問題になる場合が多いですが、査読者のQRPについても考えるべきかと思えます。	山田祐樹先生からのコメント:大坪先生のご発表へのご質問なのに恐縮ですが、このようなことをまとめたことがあります。何かご参考になりましたら幸いです。http://cogpsy.jp/wp/wp-content/uploads/COGPSY-TR-007.pdf
ある雑誌に論文を投稿した際に、探索的な目的で検討しているため仮説を設けていなかった点について、査読者から「仮説を設けるべきだ」とコメントをいただきました。それについてはどう思われますか。論文執筆者のQRPが問題になる場合が多いですが、査読者のQRPについても考えるべきかと思えます。	大坪庸介先生からのコメント:ご指摘になっているのは、審査者からHARKingをするように指示されたということだと思います。それには従う必要はないと思います。『社会心理学研究』では、HARKingを促すようなコメントがあった場合は、主査レベルで対処していただくようにしております。
オープン化の流れについては研究者側から理解できるのですが、参加者にどのように伝えるかについて疑問があります。データをオープンにすることは、参加者に前もって同意を得る必要があると思いますが、どのように同意をとっていらっしゃるのでしょうか？きちんとこのプラットフォームにデータをオープンにするなど、伝えておくのでしょうか？	大坪庸介先生からのコメント:OSFにサンプルのinformed consentがあり、ご質問の部分について、次のような記述例があります。An anonymized version of the data from this study may be made publicly accessible...without obtaining additional written consent. 同意書のサンプルは次の通りです:https://osf.io/g4fr/
オープン化の流れは嫌いな研究者を追い落とす／追い出すため使われる可能性はないのでしょうか？昔の研究での基準と今の研究での流れは違うでしょう。	山田祐樹先生からのコメント:確かに。近い例としてはオープンサイエンスに伴う攻撃的な実態については#bropenscienceとして議論されていますね・・・https://thepsychologist.lbps.org.uk/volume-33/november-2020/bropenscience-broken-science
サンプリングプランのところで事前に別のデータ(プレ実験など)を取得して、その分析結果を基に結果の再現や新たな仮説を生成して登録をする場合はどれを選択したらいいのでしょうか。以前に取得したデータも論文化するときには一緒に報告するとしてです。	山田先生のコメント:これはExisting Dataのところのことですか？それだったら上から4番目か5番目かなと思います。そして下の欄で説明追加ですね。
プレジでサンプルサイズを示すことが一般的。しかし; 1. 全数調査が理想ならサンプル数が多いほど理想に近づける 2. 参加者が報酬を求めて実験参加する場合3Rの考慮は不要 3. 出版バイアスを踏まえると先行研究に基づく効果量予想は過大 →事前設定するサンプル数は多いほど良い？引用のSimmonsもそんなことを。	山田先生のコメント:多い場合も正当化したほうがいいんだろうとは思いますが(事前か事後かは別として)。過大で設定した場合、それに満たないことが査読過程でどう評価されるかですね。興味深い論点です。
プレジのアップデートは何回でも可能ですか？例えばデータに合わせて分析方法を変更した(1回目)、査読者に指摘されて分析を追加した(2回目)のような場合です。もしくは最初のプレジで「分析を追加する可能性がある」と書いておき更新が少ない方がいいのでしょうか。	山田先生のコメント:試してはいたのですが、何回でも可能な予感が匂い立ちます。しかしおそらく全ての更新履歴が残りますので、あまりに頻回だと不審に見えるんじゃないですかね・・・少なくとも私が見たらなんじやこりやってリアルで声に出して言うと思います。
プレジはひとつのツールとして重要だと思いますが、これにより探索的研究の価値が下がるようなことがあってはならないと考えます。探索的研究を3-4つやっただうで、最後のひとつの研究をプレジするくらいがちょうどいいのではと思いました。特に若手の研究者には、自由に探索する経験していただいた方が分野の発展につながるのでは？ プレジを閉じる、ということがどういうことを指すのか、教えていただけますでしょうか？	山田先生のコメント:はい、それくらいのバランスはとてもよろしいように思います。なお、国際誌にはExploratory Reportsや(Cortex), Discovery Reports + Update Articles (PLOS Biology) などのフォーマットがありまして私は興味を持っています。
二次分析のことを考えるとCC by 4.0...にしてほしいのですが、それ以外にやる意味って現実的にあるんでしょうか？また、No liceneceにしたとしても無知な人に勝手に使われるリスクがありそうです。	山田祐樹先生からのコメント:そうですね。今のところおまじない的な状態だとは思いますが、今後のことも考えて設定しておくという感じでしょうね。
仮説が支持されなかった研究を発表しづらいことがそもそもの問題な気がしています。	山田先生からのコメント:ほんとにそうですね・・・
公認心理師養成過程で働いている教員です。この話は大事なことは重々承知しているのですが、半期の授業でここまで到達することの難しさを感じています。	山田先生のコメント:>公認心理師養成過程で わかります。公認心理師まわりでの方法論教育の問題はぜひ議論を進めたいところです。

<p>村山先生、「業界全体」というのはどの範囲を指すのでしょうか？社会心理学でしょうか？心理学一般でしょうか？今回お話しされた内容は社会心理学specificの内容と心理学一般に関連する内容が混ざっている印象ですが、心理学全体で議論しようと思うと、かえって合意をとるのが難しくなるような気がします。</p>	<p>村山先生のコメント:個々の話は確かに領域 specific な話もありました。すみません、曖昧でした。ただ、人間観が変わってきたというのは結構どの領域でも(心理の低位領域でも neuroscience でも)同じだと思っています。</p>
<p>村山先生:Marekの研究で脳と認知の関連を見るには数千N必要とあるものの、実際予算上数千Nとすることは中々難しいと思われま。一方、NeuroPowerで2条件の差を見るには44必要と出力されることもあるようです。個人的には44でも収集できるときに収集し、検証を重ねることが現実的と感じていますが、いかがでしょうか？</p>	<p>村山先生のコメント: Marek の研究は個人差研究で、被験者内の条件間の差は別の話だと思います。被験者内の条件間の差だと、30-40人くらいでも replicable な効果を見ることは多いです(報酬と線条体の関係だと10人くらいでも有意にできます)。</p>
<p>村山先生:Marekの研究で脳と認知の関連を見るには数千N必要とあるものの、実際予算上数千Nとすることは中々難しいと思われま。一方、NeuroPowerで2条件の差を見るには44必要と出力されることもあるようです。個人的には44でも収集できるときに収集し、検証を重ねることが現実的と感じていますが、いかがでしょうか？</p>	<p>〇〇先生のコメント:村山先生 ご教授頂きありがとうございます。すみません、お話を誤解しておりました。より研鑽に努めたいと思います、ありがとうございます。</p>
<p>特に学生にとって、ブレレジの実践のハードルを上げているのは英作文だと思われま。OSFに和文でブレレジすることが許されているのでしょうか。システム上許されているとしたら、ブレレジとしての効果や意義が損なわれてしまうのでしょうか。</p>	<p>山田先生のコメント:日本語でも良いと思います。実際私関連でもあります。ただし、国際誌に出す予定の場合、査読者が読めなくなってしまうことが多いので注意です。国内誌ならよいかと。</p>
<p>試しにOSFでやってみようと思い、今"Register"で選択肢("OSF Preregistration"など)が多くある画面なのですが、この後"Create"するともう消せなくなりますか？あるいは、どこまで行くと消去できなくなるのでしょうか？</p>	<p>山田先生のコメント:最後に承認が必要で、その公式登録の後です。試しにblankページを見て見るくらいだと消せます！</p>
<p>若手研究者です。研究費の申請や就職活動においてもopen scienceが評価されるようになったという話を聞いて少しホッとしました。テニユアの方々には、(方法論の伝授もちろん大事ですが)制度上の若手支援や業界の改善に尽力いただきたいです。焦らずに研究できる環境が重要な気がします。問題のコアでもあるように思います。</p>	<p>(口頭で回答)</p>